第３０回総会　研究発表要旨

妖精物語の隆盛とペロー物語

大山明子

今日「童話」として広く親しまれるペローの物語集、とりわけ *Histoires ou Contes du temps passé. Avec des moralités* (1697）は、当初から専ら子供向けに綴られたとは考え難い。「新旧論争」へのペローの積極的な関与や、時の上流社会を席捲した「妖精物語」― これらに目を向ける時、ペロー物語を 17 世紀フランスの文学的現象と切り離すことは、もはやできない。本論考では、17 世紀末の「妖精物語」の隆盛をひとつの重要な文化現象として捉えること、そこにペローの物語集が占める独特な位置を見いだすことによって、ペロー物語を従来の「童話」という枠組みから解放し、新たな視点から再評価することを試みる。

主に 1685 年から 1700 年にかけて、フランスでは、「妖精物語」（contes de fées）と呼ばれ、超自然的内容を特徴とするおとぎ話が数多く産出され、とりわけサロンにおいて享受された。当時から今日に至るまで、この現象は専ら「流行」として捉えられるが、それが偶発的で一時的なものであったかということは、問い直してみる必要がある。その視点から「妖精物語」の広大なコーパスを俯瞰すると、それらの物語の誕生と興隆には、時の上流社会人の柔軟な文芸受容の態度が、その母胎を着実に築いていたということが明らかになる。「妖精物語」は、民話から中世の騎士道物語、バロック小説に至るまで、過去の文芸から種々の影響を受け、半ば混合物的様相を呈する。その複雑な構造と「妖精」のモチーフは当時の知識人の関心をも呼び、ここにおいて「妖精物語」は 17 世紀における文芸論争の中で捉えうるものとなる。そして中には、虚構的楽しみへの社会的要請に応えるだけでなく、文学論争上の意図をも含み持つと考えられる物語が確かに認められるのである。

ペローの物語および周辺テクストからは、「妖精物語」を新たな文学的カテゴリーとして擁護しようとする姿勢が窺われる。そこにおいて、ペロー物語の妖精モチーフが果たしている機能を浮き彫りにするため、レリチエ嬢およびベルナール嬢による物語との比較分析を試みる。そこでは、１）ペロー版の妖精が子供への言語モデルを提示するメタ言語的機能を担いうること、そして主人公の言語的成長の物語が二重写しにされることによって、ペローの作品は「妖精物語」の教育的価値を高めつつ、上流社会の言語観に立脚した論争的価値をも含み持つものとなっていること　２）妖精モチーフに対する一種の隔たりによって、物語の現実的側面を強調し、単純な物語の奥により教育的・道徳的意味を読むことへと熟達した読み手を誘う、作者の視線が見いだされること、が示される。

かくしてペロー物語には、人間の現実や上流社会の価値観に深く結びついた妖精モチーフによって、物語の教育的・道徳的価値を充実させ、「妖精物語」の正当性を主張しようとする姿勢が見いだされる。古代神話の神々に比肩しうるほどに価値を高められたペローの妖精は、「新旧論争」の対立図式を象徴的に描くようでもあり、その物語に、ペローの道徳教育的試みと文芸論争的試みとの美学的価値における結晶が立ち現れるのである。

サミュエル・ベケット『事の次第』におけるアレゴリー

岩永大気

ベケットの作品に対しては従来様々な解釈が試みられてきたが、それに反して作家自身は象徴表現に対して否定的な見方をしている。我々はこの点に注目し、まず、ベケットの作品がアレゴリーとして解釈できるとすれば、それはどのようにしてかということを考察した。ベケットの書いた評論等を読めば、そこには確かに象徴表現、特にアレゴリーに対して否定的な見方がなされていることが分かる。しかし、その考えは、アレゴリーを概念の形象への単純な変換として見る、ドイツ・ロマン派に端を発する見方に基づいているのであり、一種相対的な見方に過ぎない。翻って、中世のアレゴリー文学を見たとき、そこに見出される関係とは、単なる概念から形象へという一方向的な関係ではなく、筋と意味が互いに影響を及ぼしあう、弁証法的な関係である。このような見地から、我々はベケットの作品が、弁証法的なアレゴリーとして理解しうるのではないかと考え、作品『事の次第』を考察し、その意味を問うた。

『事の次第』においては、語り手の存在様態と語り手の語りそれ自体の様態に平行性が見られる。こうした平行性から、語り手にとって語り続けることは自らの存在それ自体に関わるものとなる。語りが存在を生み出すこの小説において、すべては恣意性に支配されており、また語り手はこの小説において泥と暗闇に囲まれ、語るべきものが周囲に何もない状況に置かれている。こうして、限りない不確かさの中で、非常に限られた素材から物語を紡いでいくということが、この作品のテーマとなる。ここで、この作品において、言われることと意味されることの間に相互依存的な関係を措定することで、両者は必然的に弁証法的な関係で結ばれることになる。言われることと意味されることの二つが緊密に結びついているこのような小説において、ある潜在的な意味を形象化するということは不可能である。こうして語り手と語りは、行為の零度とも言うべき、単に持続するために持続するという行為にたどり着くのである。しかし、小説世界において、語り手はある状況の中に生きる。こうして、アレゴリーは、ある状況の中での語りの追求というテーマを表現するものとなるのではないかという仮説に導かれる。

実際に『事の次第』の第一部から第三部を分析すると、語り手の状況が変化するに従って、語りの内容が変化していくのが観察される。具体的には、第一部では記憶にまつわるイメージが問題となり、第二部ではある形象、あるいは登場人物を媒介した語りがなされ、第三部ではものごとの現実体はもはや問題とならず、可能性のそれぞれを推論するということが問題となっており、各部の移行は、第一部最終における、記憶を象徴すると思われる袋の喪失、および第二部の最後で語り手が語らせる男が去って行くことに象徴されている。また、上記の三つの語りの方法はジル・ドゥルーズが提示したベケットの三つの「言語」におおむね対応し、このことから、『事の次第』は、アレゴリー的手法を用い、作家の方法論の集大成として書かれたと推察される。